

『純白オメガに初恋プロポーズ』

著：若月京子

ill：明神 翼

「キ、キミ、名前は？」

「……………」

突然のことに悠希が目を丸くしたまま固まっていると、必死の形相で言われる。

「好きだ！ キミに一目惚れしたっ。私と付き合っほしい！ 結婚してくれっ」

「……え？」

一瞬、何を言われたのか分からなかった。言葉の意味は理解できたのだが、そんなわけがないと打ち消してしまう。

「好き……一目惚れ……付き合う……結婚——……ええーっ!?!」

いきなりの告白、そしてプロポーズ。

告白されたのは初めてではないが、プロポーズは初めてだ。そしてそれがセットで、自己紹介もしないうちになんていうのは悠希の常識の中にある。

あまりにも突然、怒涛のように攻め込まれ、悠希は目を白黒させる。

「キミはベータだろうか？ それともオメガ？」

「オ、オメガです……………」

悠希がそう答えると、将宗の表情が喜びに満ちる。

「それは素晴らしい。オメガなら、結婚できるな。なんて好都合なんだ。私の番になってくれ！」

「……………」

二度目のプロポーズに、聞き間違いではなくどうやら将宗が本気で言っているらしいと悟る。

だからこそ驚きは大きく、悠希はポカンと口を開けてしまった。

「そんなふうは無防備に口を開けて……誘っているのか？ 誘っているんだな？ キスがOKということは、結婚もOKということだろうか？」

とんでもない発言に悠希はハッと我に返り、慌てて口を閉じる。そして、プルプルと首を横に振った。呑気にぼんやりすることもできないらしい。

「こ、これは、驚いていただけですからっ。キスを誘うとか、そういうのじゃありません。それに結婚って……まだ付き合っもないのに？ それ以前に、知り合っすらいらないんですけど……………」

「あ——ああ、そうだったな。失礼。逃がしたくない一心で焦った。私らしくもない……………」

将宗はコホンと軽く咳払いをし、落ち着きを取り戻した声で言う。

「私の名前は、八神将宗。将宗と呼んでくれ。さっき、講演に来てくれていただろう？ 一目見

て、目が離せなくなった」

「目が合ったの、やっぱり気のせいじゃなかったんだ……隣の女性が見つめられてるって言うたから、自意識過剰なのかと思ってました……」

将宗は怪訝そうな表情をする。

「隣の女性？ 隣には男しかいなかったらう。キミと親しげに話していた」

「それは友人です。反対側に女性が座っていたんですけど」

「気がつかなかったな。あの男とはどういう関係なのか、それが気になって。そうか、友人か……ただの友人？」

「ただの友人です」

「しかし、オメガにとって男の友人は、ただの友人とは意味が違ってこないか？」

その質問の意味は、よく分かる。男性にもかかわらず妊娠できるオメガ男性にとって、とても難しい問題だ。アルファとベータの男性は、異性的な存在なのである。

だから悠希も、複雑な気持ちで頷く。

「それは否定できませんけど、彼は本当にただの友人ですよ。ちゃんと恋人もいるし。講演のあとも、デートだって浮き浮き帰りました」

「それはよかった。親しそうに見えて、不安だったんだ。そうか……それじゃ、私と番になっても問題ないな」

隙あらば切り込んでくる将宗は、油断できない。ぼんやりしていると、婚姻届にサインをさせられそうだ。

「いやいや、それは全然違う問題ですよ。まだ会ったばかりなのに」

「ああ、そういえばまだ名前も聞いていなかった。キミの名前を教えてくださいませんか？」

「天野悠希です。ゆうは、悠久の悠。きは、希望の希です」

「悠希……いい名前だな。キミにピッタリだ」

「ありがとうございます。将宗さんって、渋いお名前ですね」

「祖母が、武士におかしな憧れを持っていてね。独眼竜政宗からもらったらしい」

「イギリスの伯爵令嬢っていう……？」

「知っていたのか。そう、その祖母だよ」

「友人が、スマホで調べて教えてくださいました。講演に女性が殺到していたから、気になったみたいで」

実際、今も近くの席の女性が将宗を見ているし、講堂から追いかけてきた女性たちも遠巻きにこちらを見ていた。

何しろ将宗はアルファ独特のオーラを振りまいているから人目を引くし、それがなくても見とれるほどの美形なのは間違いない。

女性たちだけでなく大学や将宗の関係者らしき男性たちも驚愕の表情で固まっているが、どうやら将宗が近寄るなオーラを放っているらしく、話しかけてくる強者はいない。

将宗はそんな人々が見つめている中、真剣な表情で言うてくる。

「……悠希、改めて聞く。私と結婚してくれないか？」

「あ、改めて聞かれても……」

今のこの状況で、「はい」と言えるはずがない。それにオメガといっても、悠希の場合はわけありなのだ。

悠希は声を弱め、小声で将宗に言う。

「あの……ボクは一応オメガですけど、両親はベータなんです」

「そうか。だが、オメガなのは間違いないわけだし、番になるのに問題はないな」

「問題……あると思いますよ。両親がベータって言ったでしょう？ 両親だけでなく、双方の祖父母や親戚もみんなベータなので、ボクはベータ因子の強い、突然変異のオメガなんです。つまり、ボクが産む子はベータの可能性が高いということになります」

「構わない。そもそも、ベータでも結婚してほしいと思っていたんだ。かといって、ベータだと男同士では結婚できないからな。オメガとは幸運だった」

嬉しそうに笑われて、悠希は胸がドキドキする。

美形の笑顔は破壊力がすごいと思いながら、胸の高鳴りを抑え込んできちんと話をしなければとがんばった。

「あの……ちゃんと聞いてました？ ボク、ベータ因子の強いオメガで、ベータしか産めない可能性が高いんですよ。八神さん、八神製薬の跡継ぎなんですよね？」

「私が初めて欲しいと思った相手だ。ベータだろうがオメガだろうが関係ない。まわりはうるさいかもしれないが、捻じ伏せればいい話だ」

「えー……」

そんな単純な話ではないと思いつつ、ベータでもオメガでも関係ないと言われたのが嬉しい。

ベータ因子の強いオメガで、アルファにもベータの女性にも求められないというのが心の傷になっている悠希には、将宗の言葉が涙が出そうなほど染みた。

でもだからといって、簡単に「はい」とは言えない。何しろ将宗が求めてきたのは「結婚」であり、「番」だ。どんなに心惹かれても、すぐに頷けるものではない。

普通のアルファでも難しいのに、八神製薬の御曹司で、イギリス貴族と縁づいているアルファなんて、難しいなんていう言葉では足りない気がした。

あまりにも相手がすごすぎて、もしかしてドッキリだろうかなどというおかしい疑いが頭を過る。

「そういうわけで、私の番になってくれ」

(本気……かな？ やっぱり、ドッキリ?)

素人ドッキリがないわけではないが、仕掛け人が八神製薬の御曹司というのはありえない気がする。

悠希は混乱しながらプルプルと頭を振った。

「む……無理、です……。ボクには荷が重すぎます」

「なぜだ？ 私が嫌いなのか？ 好みではない？ それなら、キミの好みはどういう男なんだ。可能なかぎり、近づけるよう努力する」

自信満々に「なってやる」ではなく、「努力する」と言う将宗にキュンとくるものがある。こ

ういう人、好きだなあと思った。

「あの……本気で、そう言ってくれています？ ドッキリとかではなく？」

「ドッキリ？ なぜ私がそんなことを？ ああ……唐突すぎるからか。その点については私自身もどうかと思うような不格好なプロポーズになってしまったが、私は本気だ。本気で悠希に一目惚れし、番になってほしいと思っている。そのための努力は惜しまないつもりだ」

まっすぐ射貫くように目を見て、真摯にそう訴える。こんな嘘をつくとは思えなかったし、将宗の誠実な人柄や謙虚さが伝わってきて、見た目だけでなく中身も好ましいと思う。

なんて素敵な人なんだろうとうっとりしてしまう。こんな素敵なアルファにプロポーズされるなんて夢のようだった。

「それで、悠希の好みは？」

「こ、好み……というのは特になくて……八神さんはとても素敵だと思います」

「名字じゃなく、名前で呼んでほしいな。将宗だ、将宗」

「ま、将宗……さん」

「それでいい」

満足そうに頷く将宗。

「悠希のことを、よく知りたい」

そう言って悠希の隣の席に腰を下ろすと、それまで将宗の少し後ろで凍りついていた男性が悲鳴のような声をあげる。

「ま……将宗様——っ!! それはありえません！ ありえないです。ありえないんですよ」

「どうした、鳥井。うるさいぞ」

「将宗様の乳兄弟として育ってきた私には分かります。将宗様は、本気ですね。本気で、番にと申し込んでいる……でも、ベータ因子の強いオメガなんて、とんでもない。将宗様には、八神家の貴い血を受け継いでいくという大切な役割が——……」

「そんなもののために、私の運命を諦めるつもりはない」

「う、運命!？」

「誰にも心を動かされなかった私が、一目で欲しい、私のものにしたいと思った相手だぞ。有象無象が溢れた聴衆席で、悠希だけが光り輝いて見えた。運命でなくてなんだ」

「いや、しかし……オメガとはいえ、両親はベータ、祖父母までベータと言っていたではありませんか。八神家の……将宗様の花嫁にふさわしくありません」

パーティーで出会ったアルファ男性たちも同じことを考え、悠希から離れていったことを思い出す。

悠希の心に刻まれた傷だ。

それを突かれてキュッと胸が痛くなった。

「——鳥井」

将宗の発した、静かで殺気の伝わる声。目に見えない力が込められていて、まわりでチラチラと様子を窺っていた人たちをも硬直させた。

「悠希を悪く言うなら、たとえお前でも容赦しない。悠希は私の番となる相手だ。敬意を払え」

「……は、は、はい……」

(アルファの威圧……初めて見た……)

カリスマ性に溢れた、ごく一握りのアルファだけが使えるという「威圧」。それを食らわせられると、膝をついてひれ伏したくなるとのことだ。

実際に今、膝を折って蹲っている人たちもいる。

将宗はその威圧を解き、打って変わって穏やかな表情で悠希に向き直る。

「ここは人が多すぎる。時間があれば、どこか静かなところでお茶でもどうだろう？」

「時間……ええっと、六時までなら大丈夫です。夕食の支度をしないといけないので」

「夕食は、私と一緒にではダメかな？」

声に甘さをたっぷりと含んだ、誘惑。

これに抗うのは大変だったが、寂しがり屋の弟が家で待っていることを考えるとあまり遅くならない。

「それは、ちょっと……悠真が待っていますから」

「悠真……？」

「弟です。まだ中学生なので」

「弟か……ああ、そのあたりの話もすべて詳しく聞きたい。移動しよう」

大学の来客用スペースに止められた、黒塗りの高級車。白い手袋をした運転手がドアを開けてくれる。

中は広くてクッションもフカフカで、動き出しても振動が少なかった。

五分もしないうちにイタリアンらしき店に到着し、個室へと案内される。

「甘いものは？」

「好きです」

「では、お任せのデザートセットでいいかな」

「はい」

店員に注文し、将宗が大きく溜め息を漏らす。

「先ほどは、取り乱してすまなかった。車の中で少し冷静になったから、安心してほしい」

「はあ……正直、何がなんだか」

「悠希と番になりたいし、結婚したいと言ったのは本気だ。今すぐにでも……と言いたいところだが、さすがにそれは無理だろう？」

「無理ですね。どう考えても」

「悠希にその気になってもらうために、私のことを知ってもらいたいと思う。それにももちろん、悠希のこともよく知りたい。そして、なるべく早くその気になってくれ」

「はあ……」

グイグイ来られて、悠希は戸惑うしかない。

将宗が本気なのは感じられるが、どうして自分なんかに……という想いがつきまとして離れなかった。

「あの講演にいたということは、薬学部の学生だろう？ 年は？」

「二十歳です」

「若い……十一歳差か……私は三十一歳なんだが、年齢的な問題はないだろうか？」

少しばかり心配そうな、不安そうな表情が可愛い。

三十一歳という年齢だけ聞くと「おじさん」という感じがするのだが、将宗はおじさんとは程遠い。大人であり、男性的な色気がすごいと思う。

「全然、気になりません」

「それはよかった。弟くんが中学生とか」

「中学二年生です。うちは両親ともに医師をされていて、あまり家にいられないんですよ。ボクたちが小さい頃はまわりの医師たちに便宜をはかってもらったから、今はその恩返し中らしくて。夜勤や緊急呼び出しなんかで忙しくしているので、ボクはなるべく家にいるようにしています」

「中学二年生というと……私は反抗期真っ只中だったな」

「うちの悠真は、まだ来ていませんねえ。素直で、甘えん坊で、すごく可愛いんですよ」

車の中で帰宅が少し遅くなるとメールしたから、今頃寂しがっているかもしれない。

「仲がいいんだな」

「はい。もう、可愛くて、可愛くて。お手伝いもよくしてくれますしね。前まで来てくれていた家政婦さんが年齢の問題で引退してしまって、今は自分たちで家事をしています」

家事代として小遣いに大幅プラスしてくれているので、アルバイトをする必要がないのが嬉しい。両親としても、まだ中学生の悠真を家に一人にしたくないから、アルバイトをするより家にいてほしいらしい。

そういう理由で夕食に付き合うのは無理だし、あまり家を空けられず、そのためこれまでの友人付き合いも濃いものにはできなかった。オメガである悠希には、家の事情は断る言い訳になってくれていた。

けれど今は、それを残念に思う。

将宗も忙しい身だし、なかなか会えないとなれば気持ちも冷めてしまうに違いない。仕方ないと思いつつ、でもきっとそのほうがいいのだと思いつつ、いやだという想いが胸にこみ上げてくる。

「悠希の弟なら、私にとっても可愛い義弟ということになる。ぜひ紹介してほしいな。一緒に夕食を摂ったり、出かけたりしよう」

「え……」

まさかそんなことを言うとは思わなかった。突然変異のオメガでもいいと誘いをかけてくる男たちは大抵、その年なら一人でも大丈夫だからと言うのである。

一緒になんて言ったのは、将宗が初めてだ。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>